

Seishinsha SF Series



R. A. Lafferty

R・A・ラファティ

翼の贈りもの

井上 央○編訳



Benquest of Wings

青心社

これは無料の立ち読み版
です。本文 11 作品中、
3 作品の冒頭部だけを抜
粋して掲載しました。



Seishinsha SF Series

翼の贈りもの

Bequest of Wings

R・A・ラフアテイ

井上 央訳

目次

だれかがくれた翼の贈りもの	<i>Bequest of Wings</i>	5
最後の天文学者	<i>The Last Astronomer</i>	19
なつかしきゴールデンゲイト	<i>Golden Gate</i>	33
雨降る日のハリカルナッソス	<i>Rainy Day in Halicarnasses</i>	57
片目のマネシツグミ	<i>One-eyed Mocking-bird</i>	71
ケイシイ・マシン	<i>The Casey Machine</i>	89
マルタ	<i>Holy Woman</i>	113
優雅な日々と宮殿	<i>Pleasures and Palaces</i>	133
ジョン・ソルト	<i>John Salt</i>	153
深色ガラスの物語	<i>In Deepest Glass:</i>	167
——非公式ステンドグラス窓の歴史	<i>An Informal History of Stained Glass Windows</i>	
ユニークで斬新な発明の数々	<i>Inventions Bright and New</i>	185
解説		201
井上 央		

THE LAST ASTRONOMER and Other Stories: A Short Collection by R.A.Lafferty
Copyright © by The Estate of R.A.Lafferty

Published in Japanese language by the licence of Estate of R.A.Lafferty
and the Estate's agents, the Virginia Kidd Agency, Inc.
via Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo.

だれかがくれた翼の贈りもの

Bequest of Wings

「その耳障りな風ハープ、毎晩ここで弾かないといけないのかね？」

ポッター・ファームホルダーがやせつぼちの娘に迷惑そうに言った。

「そうかしら。毎晩ここに居るわけじゃないわ」
娘アンジェラが答えた。

「私がちつともここにいないって、いつもこぼしてるのは父さんじゃないの？ ねえ、私、ハープの羽根先ピックを買うのに七百五十ドルいるんだけど。」

羽根先の骨を痛めたくないから」

「わが愛しのやせつぼちの天使さん。だったら金製のピックにしなさいな」とペギー・ファームホルダー、彼女の母親である。

「そうね、もちろん金のがいいわね」とアンジェラ。
「ほかの子たちが金のピックを使つて、私だけ鍋

底鉄のピックなんていやね」

「おまえたちはカネは雲の中で勝手に増えるものだと思つてるようだな」

ポッターが不機嫌そうに言った。

「おまえたち若いやつらは、空のてっぺんから大地の上に降りて来るべきなんだ」

「ポッター・ファームホルダー、早くお金を渡し
て」

ペギーが言った。

「何でもかんでも値上がりしてるのよ、この頃は」
「私が気に入らないのは、値段が不自然に上がりすぎてるものがあることだ」

ポッターはまだ納得したくないようだった。

「さあ、持つて行くがいい、うちの天使よ。もの分
かりが悪くてすまなかつたな。おい、もう行くのか？
行くなら、少し食べてからにしなさい」

「翼で何か捕まえるわ」とアンジェラ。それから風
ハープとお金を手に、さつと姿を消してしまつた。
アンジェラが向かつたのは『雲の中のジョー』ドラッ

グストアに違いなかった。「雲の中のジョー」には風ハープ用の金製のピックがある。「ピカピカ翼のガラス磨き」が手に入るのもその店だった。支柱とキャンバスとタール、白コンドルの羽根、羽根先ワイヤ、飛行機糊もそこで手に入った。その他、食料品、飲料、テープ、雑誌、雲ゴケ、蠟ムシのロウソク、およそ人がそんな場所ではいいと思うものは何でもあった。

「あの子が『雲の中ジョー』ドラッグストアにいつも行くのは、よくないと思う」

ポッター・ファームホールダーが妻に言った。

「あそこにはどこか、まともじゃないところがある」

「あなたがあの子ぐらの頃は、いつもエース・ウィッツパンの店に入り浸^{びた}ってたわね」とペギー。

「あのお店は、どこかまともとは思えない。どころじゃなかったわ。「雲の中のジョー」は今、若者たちの『夢』の聖地になっているのよ」

「エース・ウィッツパンもそうだったさ」とポッター。ポッターがかつて入り浸っていたって？

彼は今でも入り浸っているではないか。あんな空飛ぶ若者たちがいつも寄り集まっている「雲の中のジョー」よりはるかに居心地がいいというものだ。「そもそもあの『雲の中のジョー』が、どうやってあんな場所にあり続けられるのがよく分からない」とポッター。

「まったく常識の法則を無視している」

「やれやれ、もう何十回も説明してあげたでしょう、私やアンジェラが」とペギー。

「ああいう場所があるのはフォート原理ベクトル値に基づく新しい数学を使えば説明できるのよ。ユークリッド宇宙とアインシュタイン宇宙の間には、とても薄いフォート宇宙が入り込んでいることが明らかになった。フォート宇宙ベクトルは、ほとんどどんなものでも支える強い力を生み出す。一定の限度を越えた力が求められないかぎり——というのが型どおりの説明だけど、本当は私だって、あんな場所がなぜそこにあり続けられるのかって思うわ。ああいう場所は、人間がベクトル値を発見

するまであんなところにはなかったわね。もし私たちがもう一度ベクトル値のことを忘れてしまったら、また下に落ちてくるのかしら？ ああ、かわいそうなアンジェラ、今は恐くて震えてるに違いない。もう残り時間はほとんどない。完全に発芽が終わってから六週間。その時間をもうほとんど使い切ってしまった。今、若者たちにとつてなんて生きているのが難しい世界になってしまったことでしょう。中でも「光り輝くもの」たちにとつては特別に」

「そうコウモリの翼、コウモリの翼だ」

「コウモリの翼」団の何人かが店の入り口の前をさつと通り過ぎた時、エース・ウィッツパンは嘲るあざむように言った。

「かつてコウモリの翼が、あの自然選択説を否定するために使われたのを知っているかね、ミールヨース君」(ポッター・ファームホールダーはエース・ウィッツパンの店や他の場所でミールヨースと呼ばれていた)

「進化を通して一つの大きな種の変化が起こるためには、その変化の中間段階の一つ一つに、何か生存に有利な点があればならない。でなければ、どうしてその変化が最後まで進みまることができるといふんだ。考えて見るがいい。ではネズミみたいな齧く歯類動物が翼を発達させてコウモリになるまでの一つ一つの段階に、どんな利点があるつてのかい？

変化途中の体の部分は、まだ空を飛べる翼にはなつてない。反対に手や足、カギ爪として使うにも指の先が長く伸びすぎている状態が何百万年か続くつていうんだ。そんなでは歩くことはできない。ものを上手に操ることもできない。翼にして飛ぶこともできない。何百万年間、そんな体をしてる意味がどこにあるつてえんだ？ かくして今、人々が自然選択説を拒絶する一番の理由は、そんなものが起きるはずがない、この忙しすぎる世界にあつて、そんなものが起きるのを悠長に待っている時間はないつてことなんだ」

つづきは書籍版でお楽しみ下さい。

最後の天文学者

The Last Astronomer

宇宙飛行士チャールズ・ウェインの新しい心配事は、その日の朝始まった。体重測定機の上に乗る、一曲の音楽と測定プリントをもらった時だった。曲はウィンターセットの「葬送進行曲」。プリントにはこう書いてあった。

「あなたの体重は百九十キログラム

さあ、終わりのない繰り返し歌を歌え

もはや悪態をつく必要もない

今日はあなたの死ぬ日だから」

でも宇宙飛行士は、それほど今日死にたいとは思わなかった。

「それに一キロサバを読んでいるな、この体重測定機は」と彼は忌々しそうに言った。そして測定プリントをクシャクシャと潰し、赤い草の上に投げ捨てた。すると間を入れず、機械が耳がねじれるような

わめき声を上げた。『哀れな男のための警笛』である。今の君にもう一つのメッセージがある、という知らせだった。宇宙飛行士がプリント口から出てきたプリントを取ると、こう書いてあった。

「捨てた紙を草から拾いなさい、この田舎者め。君はブタ小屋で育ったのか？」

宇宙飛行士はその紙も草の上に投げ捨てた。それから大急ぎで三枚目をプリント口からひつつかんだ。耳障りな『哀れな男のための警笛』を、一秒でも早く黙らせたかったからだ。その紙には「うすのろ」とだけ書いてあった。宇宙飛行士はその紙も他の二枚ともども草の上のうち捨て、けたたましく鳴り続く音を後ろに、ゆつくりと歩き去った。彼は今日、赤い世界と反目し合っていた。いや、すべての世界と反目し合っていたのだ。

あなたはきつと、自分の足元で世界がすべて崩れ去ってしまったという人間の話を聞いたことがあるだろう。そんな人間はまったく救いのない、呪わしい気分を満たされる。しかし宇宙飛行士チャー

ルズ・ウエインは自分の足の下で、概数にして百億の十億倍の十億倍（十の二十七乗）個の世界が壊れるのを味わったのだ。そして、今その後に残った一握りの世界は、すべて邪悪でねじくれた世界ばかりだった。この赤い世界が間違ひなくそうであるように。そして、あの体重測定機がよい見本であるように。

体重測定器とはこの赤い世界で最初に考え出されたものでも、初めて作られたものでもない。もともとは地球で生まれたものである。ところがそれが一たび赤い星の上に現れ出るや否や、怪しく得体の知れない火星の霊が取り憑いた。もともと体重測定結果以外を印刷する機能など備わっているはずはなかったのだ。韻^{いん}まで踏んだ詩のメッセージを相手に伝える能力を、その機械に与えた者などいなかったのだ。あの舌を巻くような対応力がどこからやって来たか、合理的に説明できる者はだれもいなかった。当然、哀れな男のための警笛”と呼ばれるあの最悪の唸り声を立てる機能など、最初は組み込まれていなかったのだ。

「わめき立てるのが大好きな小さな連中が、中に入り込んだんだよ」

火星の田舎の偏屈者の一人が教えてくれた。

「でも中を覗いたって何も見つかからないぜ。中に入ったのはわめき声だけだからな。他の部分は外に残ったままだ」

赤い星では、機械と動物と人間のあいだに、はっきりとした境界線がなかった。自動車^が人間を相手に（時には虫けらとだって）喧嘩をはじめて、その相手を外に放り出したりする。ところが一方では、自動車が自分で自分のエンジンをスタートさせ、運河の中に飛び込んで溺れている人間を助けたりする場合もあった。自動車にこんなことをする機能は備わってはいなかった。自動車^の霊”と呼ばれる説明不可能な何か、自動車に宿るようになったという以外にはなかったのだ。

赤い星、火星は過ぎ去った時代の基準に従えば、合理性に反する世界ということが出来るだろう。だが今となっては、一体だれに”合理性”なんてもの

をちゃんと説明することができらるうか？

「『合理性』つてのは、大きな眼鏡をかけたチビ男が家の外の世界すべてを測量するため、自分の指の丈もない『小世界観測定規』を手に持つて出かけたようなものさ」

別の火星の田舎の偏屈者が、ある時言い放った。

「その男の眼鏡にフクロウの糞がついた。その男はその糞が、遠い果てにある銀河だと思い込んだ。そこで男はそのフクロウの糞が生む重力を測定し、その重力がどのぐらい空間を歪曲するか計算する。これが『合理性』だ」

宇宙飛行士の足の下で十の二十七乗個の星が壊れ去ったという理由は、彼がかつて天文学者だったからだ。それだけの数の星すべてが、天文学が壊れた時に壊れ去ったのだ。『偉大なる天文学バブル』がはじけるのを眺めるのは、多くの人々にとつてもちろんなかなか楽しい見せ物だっただろう。でも旧世代に属する保守的な天文学者にとつては、他の人々にとつてと同じように面白くもおかしくもなかった。

中にはその崩壊のショックのあまり、命を失った者もいる。死亡者の発生率はぶざまなほど上昇した。

宇宙飛行士チャールズ・ウェインの職業であり、生きる糧であった古典的旧天文学が崩れ去った時、この失意の天文学者は、ほとんど死よりも始末が悪い鬱状態に陥った。それから地球中にみち溢れた嘲りに耐えることができなくなった。旧世代の天文学者の中に耐えられるものなど一人もいなかった。だからその中には、周囲の『ものたち』が地球より寛容な火星へと逃れる者もいたのだ。

寛容だつて？ 火星人が？ いや、確かに彼らが、時に人が嫌悪をもよおすようなものに対してさえ、ことのほか擁護的であつたのは確かだろう。

「おい、勘違いするな、今忍び笑いをしたのはオレたちじゃないぜ」

この冗談愛好家たちには嘘つき癖がある。

「クスクス笑つたのは『クスクス草』さ」

だがクスクス草がクスクス笑うのは、どこかの火星人が至近距離でクスクス笑つた時だけなのだ。

つづきは書籍版でお楽しみ下さい。

なつかしきゴールデンゲイト

Golden Gate

1.

もしあなたが誰かを拳銃で撃つて、その男を殺したとしよう。あなたは一つの方法で自分自身のその男に対する態度をはっきり示したのだと言える。あなたは一つの具体的な問題に対して、具体的な答えを与えた。良かれ悪しかれ、あなたは決然と行動したのだ。

その後どう身を処するかは、またその行動を起こした人物にかかっている、と言うこともできる。

その行為は、彼に大きな充足感を与えたかもしれない。今回の場合は、特にそうであつたらう。なぜなら他の多くの者たちも、その相手を殺してやりたかと思つていたからだ。だから、今その人々の願望が、夢の世界を照らすような怪しげな光の下で現実になるのだ。あの悪魔の曲がクライマックスへと高まってゆき、群衆の声が獣の叫びに変わつてその場

を呑み尽す時に。

そしてすべてが終わつた時、挑戦する精神、恐れしらずな心と一つに混じりあつた充足感が溢れる。すべてを支配していた感情の高まりの中から、一つの確信に満ちた理解が生まれる。平安ではない。しかし大きな達成感。人々の視野を少し外れたところでは、まるで狼の群れのように影たちがうろつき回っている。そして人はまるでランタンが輝くように光を放つ。

しかしバーナビイは木曜日の夜までその男を撃たなかつた。そして、この時はまだ月曜日だった。何もかもが明らかになる状態には、まだたどり着いていない。

ブラツキイがまさしく本物の悪の権化であることは、バーナビイには疑いの余地がなかつた。他の者みんながこれを知つていたわけではない。「ロマンラマスマ劇」(十七、十九世紀に演じられた音楽をメロで悪役を演じてドラマ、ロマンチックな劇作品)、（ちりばめたロマンチックな劇作品）で悪役を演じている役者が黒く染まつているのは、舞台照明の下に

影として現れる時だけである。舞台を離れた時には彼は黄金の心を持つている。プロレスの試合であれ、昼下がりの連続ドラマであれ、ゴールデンタイムの本格ドラマや映画であれ、あるいはここゴールデンゲイト酒場の小さな舞台の上であれ、悪者役者は——その役を終えた後は——心優しく、慎み深く、思慮分別があり、大きな心を持った気高き男なのである。

というような考え方は神話なのだ。今回の場合から見ても、真実でないことはよく分かる。

「こんなはおれにはいつも至極当然のことだったんだが」

バーナビイは言った。

「悪玉役者になるやつは、もともと悪玉なところがあるやつだけなんだ。そのうち、ちゃんと証明してやろう。証拠を全部揃えてな。おい、おれのグラスに飲んでサイダーが入っているんだ？」

「ビールが入りすぎた時は、いつもそうなるのよ」「汚い手だ。アイルランド生まれの薄汚いトリック

スターめ。ジーニーに次は『オナモミ草に火がついて』を弾けと言ってくれ」

「そんな歌、聞いたことないわよ、だだっこさん」「そんなことは分かっている。でもこの前、ない歌を弾けと言ったら、ジーニーはちゃんと弾いて見せたぞ」

バーナビイは、すでに物事の分別が付いているとは言い難い若者だった。世の貴族によくあるように、酒びたりの日々を送っていた。鼻はつぶれていたが、その辺にいる人間よりは整った容姿をしていた。彼はその店にいる三人の素敵な女性を目当てにして、ゴールデンゲイトに通っていたのだ。

このゴールデンゲイトという酒場があるのは太平洋沿いにある街ではない。それとは別の大洋の沿岸にある。その街が位置する場所で測れば、二つの海は数千マイル隔たっている。それでも、もしこのもう一つの海の名前をここで明かしたなら、人々はそこまで出かけて行って海岸線を上から下まで捜しま

わり、この素敵な店を見つけて出してしまおう。それから毎晩やって来ては席を占領し、閉店時間まで居座り続けるだろう。

この店は、今でももう十分混み合っているのだ。

カウンターの上にひじ一つ付く場所が確保できれば上出来というほどのものだ。テーブルは早い時刻から満席になり、二人連れも、そう長くは二人きりでいることができない。露出度の高い出で立ちをしたウエイトレスたちが、容赦なく別の二人連れを押し込みにやってくる。さらに店が混み合ってくる頃には、一テーブルの客の数はさらに二倍になる。やがて店の中で座っているのは女性だけとなり、男たちはテーブルの席に座った女性の後ろで立っていることになる。さらに時間がすすみ、グラスがすすみ、歌がすすんでいくと、男たちのうちには女性の膝の上に腰かけるものが出てくる。ゴールデンゲイトとは、そんなことが当たり前の店なのだ。

この店でこの膝腰掛けの習慣に先鞭をつけたのは、歌うバーテンダー、克蘭シー・オクルーンだった。

克蘭シーは女性の客に向かってバラッドやラブソングを歌いかける。歌いながら店の中をめぐる、一番うぶそうで、恥ずかしがりそうで、婚期を逃したミス風の一人に狙いを定めると、その女性の膝の上ですわって歌いかけるのだ。そして動転したその女性の心が少しは落ち着きを取り戻してくるにつれて、場を満たしている雰囲気染められ、やがて店のほかの客と声を合わせ歌いだすのである。

多くの客はゴールデンゲイトにコーラスを楽しみにやってくる。普通、人は一人きりで歌わされるのでなければ、歌うのを愛するものだ。そして店のピアノ奏者ジーニーのピアノは絶品だったのである。彼女の伴奏で客は古いバラッドを歌った。『ある町の酒場』、『今ごろあの娘にキスをしているのはだれ』、『きみが十七だった頃』、『なつかしい町の熱い季節』(ほとんどが1890年代以降の美在の歌) といった歌だった。

ゲイトは旧埠頭にある家族連れ歓迎の店だった。浜沿いで子どもが入場できる唯一の飲酒店だった。子どもたちはマグカップ入りのリンゴ酒を飲むこと

つづきは書籍版でお楽しみ下さい。

収録作初出一覧 カッコ内年号はタルサ大学資料で確認した作品執筆時期

- 「だれかがくれた翼の贈りもの」 Bequest of Wings, Rooms of Paradise, 1978 (1975)
「最後の天文学者」 The Last Astronomer, Four Stories, 1983 (1979)
「なつかしきゴールデンゲイト」 Golden Gate, Golden Gate and Other Stories, 1982 (1958)
「雨降る日のハリカルナッス」 Rainy Day in Halicarnasses, At the Sleepy Sailor, 1979 (1978)
「片目のマネシツグシ」 One-eyed Mocking Bird, Golden Gate and Other Stories, 1982 (1979)
「ケイシー・マン」 The Casey Machine, Episodes of the Argo, 1990 (1977)
「マルタ」 Holy Woman, Dotty, Limited Ed. 1990, (1958)
「優雅な日々と宮殿」 Pleasures and Palaces, Snake in His Bosom and Other Stories, 1983 (1974)
「ジョン・ソルト」 John Salt, Slippery and Other Stories, 1985 (1959, 1984)
「深色ガラスの物語——非公式ステンドグラス窓の歴史」
In Deepest Glass: An Informal History of Stained Glass Windows, Berkley Showcase 4, 1981 (1980)
「ユニークで斬新な発明の数々」 Inventions Bright and New,
Isaac Asimov's Science Fiction Magazine, 1986.5 (1983)

井上 央 いのうえひろし

1954年10月生まれ。

1978年、神戸大学農学部卒業

1990年、オレゴン大学 Ph.D. (文化人類学)

マウント・ホリヨーク大学助教授を経て、現在は大阪キリスト教短期大学 国際教養学科 教授。

電子立ち読み版 翼の贈りもの

2011年 4月23日 立読版 発行

著 者 R・A・ラファティ

編 者 井 上 央

発行者 青 木 治 道

発行所 株式会社 青 心 社

〒550-0005 大阪市西区西本町 1-13-38

新興産ビル720

電話 06-6543-2718

FAX 06-6543-2719

振替 00930-7-21375

<http://www.seishinsha-online.co.jp/>

落丁、乱丁本はご面倒ですが小社までご送付ください。送料負担にてお取替えいたします。

© Hiroshi Inoue 2011 Printed in Japan

印刷・製本 モリモト印刷株式会社

ISBN978-4-87892-381-4 C0097

翼の贈りもの 電子無料立読版 無料

『翼の贈りもの』は、
全国の書店でお買い求めいただけます。

当社直販を希望の方は下記 url へ
<http://www.seishinsha-online.co.jp>

青心社



Seishinsha SF Series